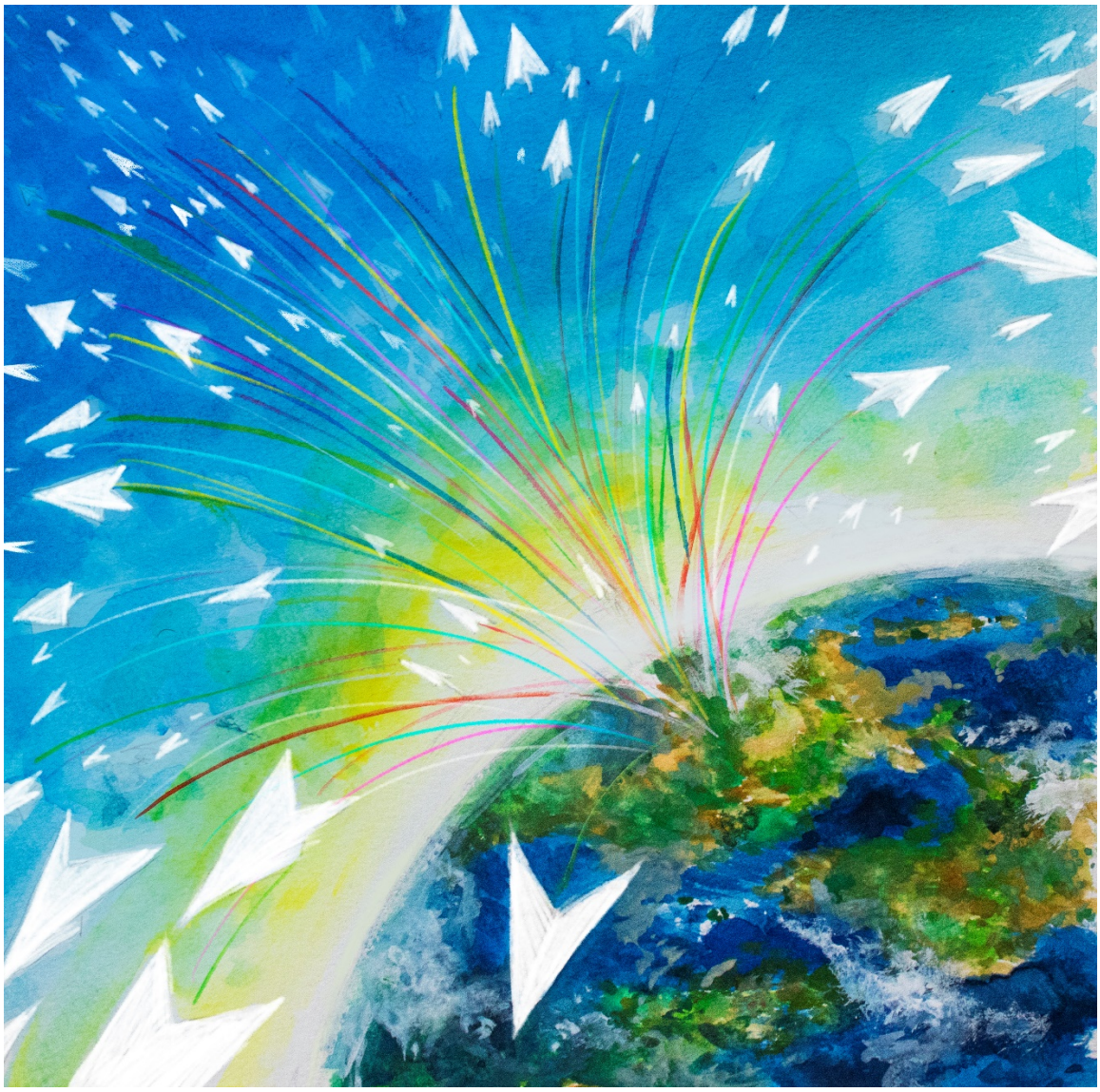
Printed 2021.0630 ISSN 2189-4957
Published by Asian Society of Human Services

Total Rehabilitation Research

June 2021
9



WA
[Message to the World]

Asian Society of Human Services

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.9.0_20
TOTAL REHABILITATION RESEARCH, VOL.9 20-31

REVIEW ARTICLE

カルチュラル・コンピテンスのジレンマに関する検討

-ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスの再構成-

陳 麗婷 1)　星野 晴彦 2)

1) 目白大学人間学部
2) 文教大学人間科学部

＜Key-words＞
カルチュラル・コンピテンス，ジレンマ， ソーシャルワーク

chen@mejiro.ac.jp（陳　麗婷）

Total Rehabilitation Research, 2021, 9:20-31. © 2021 Asian Society of Human Services

Ⅰ．問題と目的

ソーシャルワークにおいて、パラダイム転換が起きていると考えられる。多様性の尊重である。そこから多文化共生という概念も唱えられている。日本では、ソーシャルワーカーたちは支援を必要とする人々を、同一の文化を有する人々として対応してきた。この文化性という点については十分に掘り下げて、研究されてこなかった。しかし、グローバリゼーションに伴い、多文化共生の視点から福祉を捉えなおすことが重要となってきた[1)]。国際的にも、ワーカー・クライエントの関係も、ソーシャルワーカーは多文化を排除することなく、クライエントの文化を基盤とした関係に移行している。この関係性の変化を Lum は大きなパラダイムシフトと述べている[2)]。日本もその例外ではない。そして 2019 年に実施された入国管理法の改正により、さらに多くの外国人が日本に入ってくると予想される。そしてこれは日本に来たいと考えている外国人当事者たちの強い要望により実現したいというよりも、介護労働等の人材不足を補うため決断したという経過がある。かつての社会福祉サービスは、同じ文化の人々が支援を必要になった時の対応を想定してきたが、今後は宗教をはじめとする文化が異なる者に対する対応も視野に入れなければならない。

Received
February 18, 2021

Revised
March 2, 2021

Accepted
May 11, 2021

Published
June 30, 2021

以上の状況で、有効となる概念がカルチュラル・コンピテンスではないだろうか。カルチュラル・コンピテンスは個々の文化が持つ強さ・能力を意味するものではない。むしろ、ソーシャルワーカー自身がそれぞれの文化の独自性を尊重して対等の関係性により支援することを意味している。カルチュラル・コンピテンスを用いて、対等で多様性を視野に入れたソーシャルワークの検討をしていくことは、その本来的な意味を発展させるために、極めて示唆に富むものと思われる。

カルチュラル・コンピテンスが Lum により提唱され、普及された[3)]。そして万能薬として

認識されたように見える [4]。そこではソーシャルワークの焦点として、普遍性と同時に多様性を訴えることにある。主流文化が心を尽くしたサービスをしてもそれが届かないこと、そして支援が中断することを考えれば、その文化を理解しそれに沿った支援が求められるのは当然のことと言えよう [5]。Sue は先住民の宗教や祈りを尊重することが支援に役立つことを述べている [6]。しかしそれに対し、Furness は、カルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマについて、取り上げる必要を論じている [7]。 それは二つの次元で述べている。第 1 は各国のユニバーサリズムと各文化の相違により生じるものである。第 2 に、「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合することである。

カルチュラル・コンピテンスの意義を認識しつつ、そのジレンマを改めて取り上げる。本稿では、先行研究の文献レビューを行い、カルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマを明らかにし、そこから得られる知見もとにカルチュラル・コンピテンスの概念の再構築を図る。そしてここで得られた知見が、さらに深くカルチュラル・コンピテンスを検討して理論の再検討をする契機となることを期待している。

なおここでジレンマとは、ソーシャルワーカーが異なる文化に対する許容力が乏しいために生じるフラストレーションではなく、ソーシャルワーカーが一連の行動の中で、一つもしくは複数の正当な要求が相反するために、どちらかを選ばなければならない状況を示している [8]。

Ⅱ. ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンスの議論

1. カルチュラル・コンピテンスの定義と内容

ここでカルチュラル・コンピテンスの定義と内容を確認しておきたい。カルチュラル・コンピテンスを議論する際に、多文化国家であるために豊富な取り組みをしてきたアメリカの、全米ソーシャルワーカー協会の取り組みがきわめて参考となる。全米ソーシャルワーカー協会（以下、NASW）倫理綱領(2017)の前文は、以下の 3 点を述べている [9]。「ソーシャルワーク専門職の使命は人間の福祉を増進し、基本的な人間のニーズに合致するように支援することである。特にそこでは、支援が必要で、抑圧され、貧困生活をしている人々に注目すべきである」「ソーシャルワークの基本は、生活上の問題を作り、また助長する環境の力に着目し、それに立ち向かうことにある」「ソーシャルワーカーは文化や民族の多様性を十分に認識し、差別・抑圧・貧困・その他の 社会的不正義をなくすために努めなければならない」である。

また 2020 年に改定された、日本のソーシャルワーカーの倫理綱領では、原理の項で次のように述べている [10]。

原理

I（人間の尊厳）ソーシャルワーカーは、すべての人々を、出自、人種、民族、国籍、性別、性自認、性的指向、年齢、身体的精神的状況、宗教的文化的背景、社会的地位、経済状況などの違い にかかわらず、かけがえのない存在として尊重する。

III（社会正義）ソーシャルワーカーは、差別、貧困、抑圧、排除、無関心、暴力、環境破壊などの無い、自由、平等、共生に基づく社会正義の実現をめざす。

V（多様性の尊重）ソーシャルワーカーは、個人、家族、集団、地域社会に存在する多様

性を認識し、それらを尊重する社会の実現をめざす。

これはソーシャルワークが人種、民族、文化、階級、ジェンダー、性的志向、宗教、身体的あるいは精神的能力、年齢、国籍の違いを前提とした価値や知識そして技術を教え、実践することが近年の世界のソーシャルワークのスタンダードとなっていることを反映している[11]。

カルチュラル・コンピテンスに関するジレンマを論じる前に、カルチュラル・コンピテンスの定義と内容を示していきたい。

前述した NASW は「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスに関する規準と指標」(2015)を制定している[12]。そこで、カルチュラル・コンピテンスに関して、「個人やシステムが敬意を持って効果的に、文化・言語・人種・階層・民族的背景・宗教・その他の多様性の生じさせる要因を持つ人々に対応していくプロセスである。個人・家族・コミュニティの価値を認識し、肯定し、高く評価し、個々の尊厳を認識していく」と定義している。

そして、「倫理と価値」、「自己覚知」、「異文化に関する知識」、「異文化に対応する技術」、「サービス提供」、「エンパワメントとアドボカシー」、「専門職教育」、「言語多様性」、「異文化のクライエントグループに対するリーダーシップ」、「雇用における専門職の多様性」などの項目を挙げている。

そして、Sue はカルチュラル・コンピテンスの実践について次の要素を整理している[13]。

①自分自身の価値、傾向、人の行動に対する考え方に対して自覚すること
②多様な文化を背景に持つクライエントの世界観を理解する
③介入、戦略、技術を向上させること
④カルチュラル・コンピテンスを増進もしくは阻害する組織の力を認識すること

2.カルチュラル・コンピテンスのジレンマの研究数値の変化

以上、定義と内容を確認した上で、ここでカルチュラル・コンピテンスのジレンマの研究数値の変化を見てみたい。カルチュラル・コンピテンスのジレンマの議論の状況を概観するために、検索エンジン「Scopus」により、検索期間に制限は設けず、「cultural competence」、「dilemma」のキーワードをタイトルまたは抄録に含む文献として検索した。領域別に件数を示したのが表 1 であり、年代別に示したものが表 2 の通りであった。表 1 より領域として、医療が突出していること、また表 2 よりカルチュラル・コンピテンスの言及が増加するのに合わせて、ソーシャルワーク領域でも確実に増加していることがわかる。

表１　領域別のカルチュラル・コンピテンスのジレンマの文献該当数(%)

領域	件数	パーセント
医療	95	49.7
教育	24	12.7
心理	36	18.8
ビジネス	19	9.9
ソーシャルワーク	17	8.9
計	191	100

表２　年代別のカルチュラル・コンピテンスのジレンマの文献該当数

	全領域	全領域でのジレンマへの言及	ソーシャルワーク領域全体	ソーシャルワーク領域でジレンマへの言及
1960-1969	12	0	1	0
1970-1979	63	0	8	0
1980-1989	139	3	32	0
1990-1999	908	16	203	1
2000-2009	5279	49	1468	6
2010-2020	13764	123	4902	10
計	20165	191	6614	17

Ⅲ. 研究方法

1. 文献検索の方法

本研究の対象は英語で書かれた論文である。検索エンジン「Scopus」により、検索期間に制限は設けず、「cultural competence」、「social work」、「dilemma」のキーワードをタイトルまたは抄録に含む文献として検索した。Scopus（スコーパス）は、エルゼビアが提供する抄録・引用文献データベースであり、全分野（科学・技術・医学・社会科学・人文科学）の文献を収録している。

2. 文献選択基準及び除外基準

カルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマについて論じていない文献、会議録、考察が含まれない報告等は除外した。改めて、本稿ではジレンマとは、ソーシャルワーカーが異なる文化に対する許容力が乏しいために生じるフラストレーションではなく、ソーシャルワーカーが一連の行動の中で、一つもしくは複数の正当な要求が相反するために、どちらかを選ばなければならない状況を示している。よってソーシャルワーカーの経験不足により異な

る文化に対して適切ができなかったという事例は除いている。

3. 分析方法

カルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマの論点がどのようなものがあり得るかについて，以下の手順で明らかにした。

① 検索エンジン「Scopus」により「cultural competence」、「social work」、「dilemma」について検討している文献を抽出した。
② ①で抽出した文献に，また上記基準に該当する文献を除外した。
③ 入手した研究を精読し、調査の対象、ジレンマの内容を整理した。

対象文献の抽出と選定、すべての分析過程を通じ、研究者間で繰り返し検討を行い、信頼性と妥当性の確保に努めた。倫理的配慮として，使用した文献の明記を行い，対象となった文献から内容を抽出する際は，文献の論旨や文脈の意味内容を損なわないように努めた。

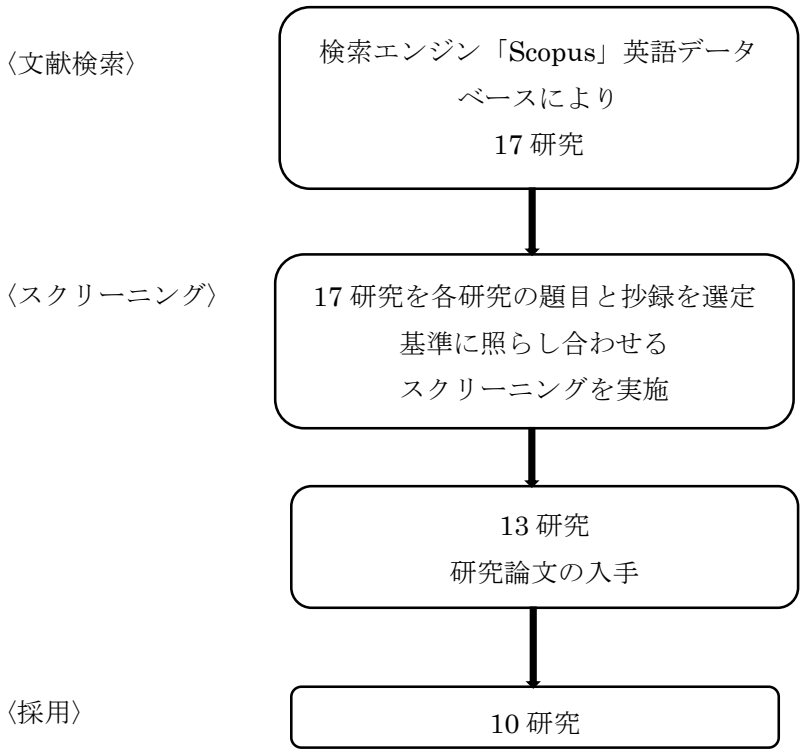


図 1　研究の選定過程

Ⅳ.結果

検索エンジン「Scopus」により「cultural competence」、「social work」、「dilemma」について検討している文献を抽出し、また上記基準に該当する文献を検索したところ、下記の１０件が該当した。またさらにその検索結果を Academic Search Premier、ERIC、PubMed で把捉できていない文献がないかを確認したところ、追加すべき文献はなかった。

表 3　該当する文献の分析結果

文献番号	著者	題目	研究の対象とジレンマの概要	視点
1	Okrey Anderson & Mcguire [14]	Personal faith and professional ethics:	(対象)性的マイノリティ (概要)宗教心の強い実践者が性的マイナリティに対して否定的に捉える傾向があり、それがソーシャルワーカーの倫理綱領と競合する。	異なる文化に対して価値と信条の葛藤
2	L.A., Davis & Lopez [15]	The impacts of processing the use of derogatory language in a social work classroom	(対象) 白人の教師、白人の学生、およびメキシコ系アメリカの学生 (概要)学生の軽蔑的な言葉の使用を対話形式の授業に用いることで、クリティカルな内省を試みる。そこで、変容的学習(J.Mezirow が提唱)の「混乱的ジレンマ（disorienting dilemma)」　(従来の価値観がゆすぶられること)、脱植民地的教育が可能となる。	ソーシャルワーカーの価値観の土台を揺るがすこと
3	Sinha, Bhola, Raguram & Chandra[16]	Power positions are embedded in our minds: focus group discussions on psychotherapy ethics in India	(対象)インドの都市のメンタルヘルス分野（臨床心理学、精神医学、精神医学的ソーシャルワーク）の 12 人の実践者 (概要)個人的および文化的価値観により、下記の倫理的ジレンマが生じる。 ・支援者とクライエントのバウンダリー(贈り物をすることなど) ・治療上の決定への家族の関与 ・治療における力関係(インドでは治療者に対する崇拝がある) ・セクシュアリティの問題への取り組みにおける価値観(インドではジェンダーの差別が強い)	異なる文化に対して価値と信条の葛藤
4	Corbin [17]	Ethical tensions and dilemmas experienced in a northern Ugandan social work internship	(対象) ウガンダ北部での 8 か月間の国際臨床インターンシップ中に米国のソーシャルワーク学生 2 名 (概要)ウガンダ北部での 8 か月間の国際臨床インターンシップ中に米国のソーシャルワーク学生 2 名に生じた倫理的緊張とジレンマ。これらの学生は、機密性、自律性、および自己決定の問題に関連する文化の違いが認められた。	異なる文化に対して価値と信条の葛藤
5	Garb & Goren [18]	Cultural and ecological contexts of violent punishment and restraint of Negev Bedouin children: From understandings to interventions	(対象)ネゲブ砂漠の遊牧民 (概要)家族が児童を拘束したり、罰したりする。街中で家族が子供を縛り付けるなどがある。それは、コミュニティ文化の要請される基準に達するためである。しかし人権擁護上警察に通報するか、関係性を作るために状況を見守るかジレンマに陥る。	「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する
6	Parrott [19]	Constructive marginality: Conflicts and dilemmas in cultural competence and anti-oppressive practice	(対象) 「建設的マージナリティ」を設定する学生ソーシャルワーカー (概要)さまざまなグループが文化的規範としての価値観を、あまり力のない他者に押し付けようとする闘争の場である。学生のソーシャルワーカーが有害と見なされる可能性のあるさまざまな文化的慣習に介入する際に直面する避けられないジレンマがある	異なる文化に対して価値と信条の葛藤
7	Abrams & Moio[20]	Critical race theory and the Cultural competence dilemma in social work education	(対象)非白人の人種、民族、または非白人の文化的な起源の個人やグループ (概要)カルチュラル・コンピテンスモデルはほとんど効果がなく、「多文化的傘」の下で抑圧を平準化する傾向は、無意識的に、制度的に構築された人種差別の重要性を超える人種に配慮しない考え方を促してしまう。	他文化の理解という次元で普及していることと、主流文化の抑圧の構造を深く認識することが一致していないこと
8	Tova Band-Winterstein. [21]	The elder abuse and neglect phenomenon in the ultra-Orthodox Jewish society: Social workers' perspectives	(対象)超正統派ユダヤ人社会(UOJS) (概要)超正統派社会において高齢者虐待とネグレクト現象に関するジレンマとデリケートな問題がこの集団に関わる時に発生する。(1) 自分の両親を尊重するという戒めがあると同時に、虐待とネグレクト現象を隠そうとする文化的圧力がある。 (2)「人生は厳しい」という信条から虐待的でネグリクト行動が生じる。	「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する
9	Nybell & Gray[22]	Race, Place, Space: Meanings of Cultural Competence in Three Child Welfare Agencies	(対象)大都市圏に 3 つの非営利の児童および家族機関 (概要)カルチュラル・コンピテンスが、各組織内のメンバーにとって、ばらつきがある。職場で権力を再分配するための葛藤が文化的に有能な組織開発のプロセスに不可欠である。カルチュラル・コンピテンスを開発するための努力は、これらの対立を確認し、表面化させ、再交渉しなければならない。	組織としてカルチュラル・コンピテンスを展開するために、組織内で理解してくれる人材を確保して、発言権を高めるためのコンフリクトを含む動態的側面
10	Georgiana Low & Kurt C. Organista[23]	Latinas and Sexual Assault Towards Culturally Sensitive Assessment and Intervention	(アメリカに住むラテンアメリカ女性の性被害) (概要) 伝統的なラテンアメリカ系性被害にあった伝統的なラテンアメリカ系女性がそれを訴えようとするとそれを恥として阻む家族や文化がある。伝統的なラテンアメリカ系とアメリカの性別役割システムの性的暴行に関する二つの文化のモデルのジレンマがある。	「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.9.0_20
TOTAL REHABILITATION RESEARCH, VOL.9 20-31

V．考察

本稿の原点は日本が多文化ソーシャルワークに取り組むようになり、また国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワークの定義が変わって「先住民の知」が言及されるようになったが、それに対してカルチュラル・コンピテンスのジレンマに関して、日本が参考にするものがないのかということであった。本研究では、カルチュラル・コンピテンスの理念に賛同しつつも、前述したようにそのジレンマに言及している論文の増加が認められた。現実的実践場面ではソーシャルワークにおいてカルチュラル・コンピテンスのジレンマが認識されるようになってきたものと考えられる。そこには、5 つの視点が挙げられた。

① カルチュラル・コンピテンスが、他文化の理解という次元で普及していることと、主流文化の抑圧の構造を深く認識することが一致していないこと
② 「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する
③ 異なる文化に対して価値と信条の葛藤(実践者の譲れない基準の存在)
④ ソーシャルワーカーの価値観の土台を揺るがすこと
⑤ 組織としてカルチュラル・コンピテンスを展開するために、組織内で理解してくれる人材を確保して、発言権を高めるためのコンフリクトを含む動態的側面

上記の文献の整理に関して、5 つの点を述べていきたい。

1. 他文化の理解という次元で普及していることと、主流文化の抑圧の構造を深く認識することが一致していないこと

カルチュラル・コンピテンスの用語は、性別、セクシュアリティ、宗教、年齢、能力、言語、国籍などに関するグループの違いを含むように発展してきた。そして普及してきた。しかし他方で文化の理解と自己覚知に注目されてきたきらいもあり、それに異議を唱える議論も生じてきた。それぞれの差別の個人的および社会的アイデンティティを強調する抑圧の構造に関して、人種的および民族的カテゴリーを入念に検討したカルチュラル・コンピテンスとして捉えていく必要がある。

2. 「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合する

「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」が対立し、競合することである。それに関して国際ソーシャルワーク連盟のソーシャルワーク専門職のグローバル定義注釈では、下記の通り述べている[24]。

「ソーシャルワークの大原則は、人間の内在的価値と尊厳の尊重、危害を加えないこと、多様性の尊重、人権と社会正義の支持である。

「危害を加えないこと」と「多様性の尊重」は、状況によっては、対立し、競合する価値観となることがある。たとえば、女性や同性愛者などのマイノリティの権利（生存権さえも）が文化の名において侵害される場合などである。文化的信条、価値、および伝統が人々の基本的人権を侵害するところでは、そのようなアプローチ（基本的人権アプローチ）が建設的な対決と変化を促すかもしれない。そもそも文化とは社会的に構成されるダイナミックなものであり、解体され変化しうるものである。そのような建設的な対決、解体、および変化は、特定の文化的価値・信条・伝統を深く理解した上で、人権という（特定の文化よりも）広範な問題に関して、その文化的集団のメンバーと批判的で思慮深い対話を行うことを通して促進されうる。」

ソーシャルワーカーがクライエントとの間で、権利性と文化的信条の間でソーシャルワー

カーが葛藤しながら支援した事例が示されている。Jim Ife が国際ソーシャルワーカー連盟の人権に関する声明は、ともすると法的、国家の義務内で議論される[25]。それがたしかに多くのソーシャルワーカーにとって問題なく見えるであろうが、従来の法に従う行為以上を求められる時に人権をソーシャルワーカーが本当に求められる時には人権に深く寄与することとなる[26]。

しかし、上記の文献を見たところ、文化における価値と信条の葛藤に関して、対話と葛藤している姿が示されている。人権擁護の視点から、文化的には許容されていたとしても、虐待と認識される行為がある。これは皮相的に多様性の尊重と促進という次元に留まらないことを示唆している。そして法的保護措置を講じるかに迷い、警察への通報を遅らせて家庭再統合向けた支援をしている経過にも注目したい。また文化には宗教的であるように見えて、実際はその集団が独自に構成員に課しているものもある。

これらについては、自己覚知の視点から論じるだけでは解決しえない問題もあるようにも考えられ、さらに深くカルチュラル・コンピテンスを検討して理論の再検討をする契機となることを期待している。

3. 異なる文化における価値と信条の葛藤(実践者の譲れない基準の存在)。

一般的に見られるのが、欧米文化と他の文化の相違である。欧米は価値として、分離と個人主義、自立、自律、自己満足、競争的、自己表現、主張性、成果主義、即効性、技術依存、科学中心主義、物質主義がある[27]。ユニバーリズム(普遍主義的基準)とマイノリティ文化の相違により生じるものである。

たしかに文化の独自性があることと倫理のジレンマは混同してはならない[28]。

スウェーデンでもそのユニバーサリズムにより、ソーシャルワーカーがイスラム教徒に対して、女性差別の側面から、彼らに対して許容できないという姿勢を示すのである。ここで重要なのは先進的に多文化共生を志しているスウェーデンでも、妥協できない自分たちの基準を持っているということである。各国が多文化共生をどこかで志しながらも、譲れない一線としてのユニバーサル基準を設けているために生じるジレンマが生じうる。

4. 自己の価値観を揺るがすこと

NASW の「ソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンスに関する規準と指標」(2015)では自己覚知の項目を設定している。ただ、自己覚知というものは、決して安易なものではなく、自己の価値の土台を大きく揺るがすものである[29]。自己覚知は既に述べられたところである。時にカルチュラル・コンピテンスが基盤としている、自分たちの文化を根本から再検討しなければならなくなる時がある。Chung はワーカーとクライエント関係で対話により、新しい関係と意味を再構成する、と述べている[30]。言ってみればソーシャルワーカーは文化中立性を保ち、自分の世界の中で完結するものではなく、クライエントとの共有できる世界を構築するような動態性を示唆している。これに関して創意工夫と創造性を発揮する社会福祉実践の現場として尾崎が述べていることを引用したい[31]。「現場は①サービスやケア、相談などの提供を通して、一人一人のクライエントの自己実現を支援し、従事者と利用者が福祉理念の具現化を図る最前線である②現場はそこにいる人々がお互いにかかわり、交わることによって、それぞれが自らに向かい合い、相互成長・変容を目指す場である。③現場は実践を通して生活、歴史、社会について認識を深め、社会の改革に関心を持つ場である。④現場は完璧な場ではなく、どこかで不完全さを含みこんでいる。また、現場にはあらかじめ正しい答えが用意されていない。しかしだからこそ創意工夫が生かされる場で

あり、新たな生活文化、価値、創造性を育てうる場である」。

ワーカーとクライエントの相互作用ダイナミズムにより一度自分の価値・信条の土台がくずれ、新たな共有世界を築く可能性もあるのである。

5. 組織としてカルチュラル・コンピテンスを展開するために、組織内で理解してくれる人材を確保して、発言権を高めるためのコンフリクトを含む動態的側面

前述したように、Sue は、カルチュラル・コンピテンスを増進もしくは阻害する組織の力を認識することの重要性を述べている [6]。これは国際的にも、また日本においても倫理綱領と軌を一にするものである。ソーシャルワーカーが抑圧的な実践や資源が不公正な配分がなされている状況に関して、雇用者・政策決定者に関心を向けさせなければならないというものである [33]。カルチュラル・コンピテンスは組織内の文脈と無関係ではいられない。組織にはそれぞれの支援に関する使命や方針があるが、表 1 で、Nybell が述べている通り、カルチュラル・コンピテンスを現実的に高めるために、組織内でのカルチュラル・コンピテンスの理解を促すための組織・職場における働きかけが求められることも示唆されている。

VI. おわりに

多様性の尊重とカルチュラル・コンピテンスは今後重要な概念となるであろうことは想像に難くない、しかしそこには様々な下記の論点がある。

それぞれの文化が尊重されるべきではあるが、生活文化とソーシャルワークの価値が対立した時に、個人の権利を侵害する場合は文化を是認されるものではないことを示唆している。そして、文化と人権が拮抗するときに、人権を軸に支援に当たらなければならないこともある [34]。他方で、自分たちの文化が正しいと考えていた基準を根底から再検討しなければならなくなる時もある [35]。

以上を実践現場に照らしてさらにカルチュラル・コンピテンスの理論の再構成を図る必要性を認識される。

ただし、本稿では現在発刊された論文の文献レビューであり、カルチュラル・コンピテンスにおけるジレンマを考えるにあたり、十分に実践を網羅できたわけではない。また、2 点について述べることはできなかった。

第一は、文化を一様に取り上げているが、実は主流文化に柔軟に適応して発言権を高める思考形態のあるものとないものがあることである。

第二は文化と理解されているものの中でも、単一のものととらえるべきではなく、さらに小グループがあり、それぞれに異なることである。

その解決にむけての手がかりを十分に示すことができなかった。実践現場への調査を踏まえさらに精緻なものにしていきたい。

文献

1) 石河久美子. 多文化ソーシャルワークの理論と実践. 2012, 明石書店, 東京.
2) Lum D. *Culturally competent practice*, 2011, Brooks/Cole, 4.
3) Lum D. *Culturally competent practice*, 1999, Brooks/Cole, 199.
4) Nadan Y. Rethinking 'cultural competence' in international social work, *International Social Work*, 2014, 60(1), 181-188.
5) Laird S. Anti-Oppressive Social Work, *A Guide for Developing Cultural Competence*, 2008, SAGE, 93-94.
6) Sue D. *Multi -cultural social work practice*, 2016, Wiley, 80.
7) Furness S & Gilligan P. *Religion, belief and social work*, 2009, Bristol University Press.
8) Borrmann S. Ethical dilemmas in practice, *Ethics and value perspectives in social work*, 2010, Palgrave Macmilan, 51.
9) The National Association of Social Workers. *Code of Ethics,* 2017, The National Association of Social Workers.
10) 日本ソーシャルワーカー連盟. ソーシャルワーカーの倫理綱領. 2020, 日本ソーシャルワーカー連盟.
11) 添田正揮. ソーシャルワーク教育における文化的コンピテンスと多様性、川崎医療福祉学会誌, 2012, 2(1), 1.
12) National Association of Social Workers. *Standards and Indicators for Cultural Competence in Social Work Practice*, 2015, National Association of Social Workers.
13) Sue D. *Multi- cultural social work compractice*, 2016, Wiley, 62-67.
14) Anderson S & McGuire JK. Personal faith and professional ethics, *Social Work*, 2019, 64(4), 365-372.
15) Walker LA, Davis DK & Lopez M. The impacts of processing the use of derogatory language in a social work classroom, *Journal of Ethnic and Cultural Diversity in Social Work*, 2018, 27(1), 41-53.
16) Sinha A, Bhola P, Raguram A, Chandra PS. Power positions are embedded in our minds, *International Journal of Culture and Mental Health*, 2017, 10(2), 217-227.
17) Corbin J. Ethical tensions and dilemmas experienced in a northern Ugandan social work internship, *Journal of Social Work Education*, 2012, 48, 817-836.
18) Garb Y & Goren T. Cultural and ecological contexts of violent punishment and restraint of Negev Bedouin children: From understandings to interventions, *Child Abuse Review*, 2010, 19(4), 273-290.
19) Parrott L. Constructive marginality, *Social Work Education*, 2009, 28(6), 617-630.
20) Abrams LS & Moio JA. Critical race theory and the Cultural competence dilemma in social work education, *Journal of Social Work Education*, 2009, 45(2), 245-261.
21) Band-Winterstein T. The elder abuse and neglect phenomenon in the ultra-Orthodox Jewish society, *International Psychogeriatrics,* 2018, 30(9),1-10.
22) Nybell LM & Gray S. Race, Place, Space: Meanings of Cultural Competence in Three Child Welfare Agencies, *Social Work*, 2004, 49(1), 17-26.
23) Georgiana L & Organista K. Latinas and Sexual Assault, *Journal of Multicultural Social Work*, 2000, 8,131-157.
24) International Federation of Social Workers. Global Definition of the Social Work Profession, 2014.

25) Ife J. Human rights and social justice, (Gray M ed) *Ethics and value perspectives in social work*, 2010, Palgrave Macmilan,51
26) Abrams LS & Moio JA. Critical race theory and the Cultural competence dilemma in social work education, *Journal of Social Work Education*, 2009, 45(2), 245-261.
27) Laird S. Anti-Oppressive Social Work, *A Guide for Developing Cultural Competence*, 2008, SAGE, 93-94.
28) Lum D. *Culturally Competent Practice*, 2010, Brooks/Cole, 376.
29) National Association of Social Workers. *Standards and Indicators for Cultural Competence in Social Work Practice,* 2015, National Association of Social Workers.
30) Chung M. Rethinking Self-Awareness in Cultural Competence: Toward a Dialogic Self in Cross-Cultural Social Work, *The journal of contemporary human services*, 2005, 86(2), 181-188.
31) 尾崎新. 現場の力(尾崎新編). 2002, 誠信書房, 東京.
32) International Federation of Social Workers. *Global Social Work Statement of Ethical Principles*, 2018, International Federation of Social Workers.
33) International Federation of Social Workers. *Global Definition of the Social Work Profession*, 2014 International Federation of Social Workers.
34) Hodge D. Social Work and the House of Islam: Orienting Practitioners to the Beliefs and. Values of Muslims in the United States, *Social Work*, 2005, 50(2), 162-73.

DOI: https://doi.org/10.20744/trr.9.0_20
TOTAL REHABILITATION RESEARCH, VOL.9 20-31

REVIEW ARTICLE

A Study of the Dilemma of Cultural Competence;

Reconstruction of Cultural Competencies in Social Work

Liting CHEN [1)] Haruhiko HOSHINO [2)]

1) Human Department, Mejiro University
2) Human Science Department, Bunkyo University

ABSTRACT

Cultural competence refers to an ability to interact effectively with people of different cultures. Cultural competence comprises four components: (a) Awareness of one's own cultural worldview, (b) Attitude towards cultural differences, (c) Knowledge of different cultural practices and worldviews, and (d) cross-cultural skills. Developing cultural competence results in an ability to understand, communicate with, and effectively interact with people across cultures.

In order to reconstruct the problem within the current cultural competence framework, we tried to analyze the previous studies and clarify the dilemmas of cultural competence in social work, based on the findings obtained from this review. The aim of the study is to further examine cultural competence and reexamine standard theories that are prevalent in social work today. We used the search engine “Scopus” and filtered the articles that included the keywords "cultural competence", "social work", and "dilemma" in the title or abstract. Afterwards, we went through the resulting ten articles.

From the findings, we found that there were five perspectives on dilemmas in relation to cultural competence in social work, which are as follows.

(1) Cultural competence is widespread among social workers but the fact of the matter is that there still must be a recognition that society has a structure of oppression that must be dealt with.
(2) The principles of “Do no harm” and “respect for diversity” are often in conflict when meeting cultures who disrespect certain human rights we hold as fundamental in Social Work.
(3) External conflict between the social worker and the minority community they service that hold opposing values or beliefs
(4) Internal Conflict in which a practitioner holds certain core beliefs which threaten their ability to provide superior service to a client.
(5) Social workers should work to alert their employers and colleagues about policies within the organization that are inadequate, oppressive, unfair, or harmful.

＜Key-words＞

cultural competence, dialogue, dilemma, social work

chen@mejiro.ac.jp（Liting CHEN）

Total Rehabilitation Research, 2021, 9:20-31. © 2021 Asian Society of Human Services

TOTAL REHABILITATION RESEARCH

EDITORIAL BOARD

EDITOR-IN-CHIEF

Masahiro KOHZUKI Tohoku University (Japan)

EXECTIVE EDITORS

Changwan HAN Shimonoseki City University (Japan)

Aiko KOHARA
Shimonoseki City University (Japan)

Daisuke ITO
Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)

Eonji KIM
Miyagigakuin Women's University (Japan)

Giyong YANG
Pukyong National University (Korea)

Haejin KWON
University of the Ryukyus (Japan)

Hitomi KATAOKA
Yamagata University (Japan)

Jin KIM
Choonhae College of Health Sciences (Korea)

Kyoko TAGAMI
Aichi Prefectural University (Japan)

Makoto NAGASAKA
KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)

Masami YOKOGAWA
Kanazawa University (Japan)

Megumi KODAIRA
International University of Health and Welfare Graduate School (Japan)

Misa MIURA
Tsukuba University of Technology (Japan)

Moonjung KIM
Korea Labor Force Development Institute for the aged (Korea)

Shuko SAIKI
Tohoku Fukushi University (Japan)

Suguru HARADA
Tohoku University (Japan)

Takayuki KAWAMURA
Tohoku Fukushi University (Japan)

Yoko GOTO
Sapporo Medical University (Japan)

Yongdeug KIM
Sung Kong Hoe University (Korea)

Yoshiko OGAWA
Teikyo University (Japan)

Youngaa RYOO
National Assembly Research Service: NARS (Korea)

Yuichiro HARUNA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Yuko SAKAMOTO
Fukushima Medical University (Japan)

Yuko SASAKI
Sendai Shirayuri Women's College (Japan)

EDITORIAL STAFF

EDITORIAL ASSISTANTS

Haruna TERUYA University of the Ryukyus / Shimonoseki City University (Japan)

Natsuki YANO University of the Ryukyus (Japan)

as of April 1, 2021

TOTAL REHABILITATION RESEARCH

VOL.9 JUNE 2021

© 2021 Asian Society of Human Services

Presidents | Masahiro KOHZUKI & Sunwoo LEE

Publisher | Asian Society of Human Services
1 Floor Ohara Bill, 2-11-5, Takezaki-Town, Shimonoseki-City, Yamaguchi-Prefecture, 750-0025, Japan
E-mail: ashs201091□gmail.com

Production | Asian Society of Human Services Press
1 Floor Ohara Bill, 2-11-5, Takezaki-Town, Shimonoseki-City, Yamaguchi-Prefecture, 750-0025, Japan
E-mail: ashs201091□gmail.com

Total Rehabilitation Research
VOL.9 June 2021

CONTENTS

Original Article

The Status of Vocational Rehabilitation Using Agriculture in Japan;
Survey of Work Support Centers for Continuous Employment Type B in Akita Prefecture

Kazuaki MAEBARA et al. 1

Short Paper

The Verification of Reliability and Validity of the "School QOL Scale for Children (Draft)" ;
Focusing on data from junior high schools in Okinawa Prefecture

Haruna TERUYA et al. 11

Review Article

A Study of the Dilemma of Cultural Competence;
Reconstruction of Cultural Competencies in Social Work

Liting CHEN et al. 20

Published by
Asian Society of Human Services
Yamaguchi, Japan